

# 「述懐」の今昔

前田雅之\*

『百人一首』の掉尾を飾る九十九番と百番は、順徳院と後鳥羽院の和歌である。そんなことは誰でも知っていると言われそうだが、今回、わざわざ取り上げたのは、九九番歌・百番歌を出汁にして、過去を振り返って嘆くという意味合いの「述懐」がテーマとなっている和歌のありようから、日本において過去や不遇な我身を悲観的に振り返ることの意味合いを考えてみたいからである。まずは、上記の二首はどのような和歌なのか。

後鳥羽院御製

九九 人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑにものおもふ  
身は

順徳院御製

一〇〇 ももしきやふるき軒ばのしのぶにもなほあまりあるむかし  
なりけり

(引用はすべて古典ライブラリーに拠る)

九九番の後鳥羽院詠から始めたい。歌意は、人をいとおしくもまた反対に人をうらめしくも思われることだ、どうにもならないのに、むなし

く世を思っているために、いろいろと悩んでいる身としては、くらいであらうか。一読、煮え切らない心情を詠んだ和歌のように感じるが、実は後鳥羽院が得意とする帝王ぶりの和歌の一首なのである。さほ言いながら、同じ帝王ぶりでも、『新古今集』雑中に「住吉歌合に、山を」という詞書をもつ「おく山のおどろがしたもふみわけてみちある代ぞと人に知らせん(一六三五番)」や、隠岐で詠まれた『遠島百首』にある「われこそは新島守よ隠岐の海のあらし波かぜ心してふけ(九七番)」と比較すると、明らかに力強さに欠けていよう。九九番歌は「道ある代ぞと人に知らせ」ようと、私がいるのだから、「荒き波風」は注意して吹けなどといった帝王ならではの過剰とも言える自負・自信の念が感じられない。その逆に、九九番歌に描かれる後鳥羽院は、周囲の人間を愛おしく思う反面、恨めしくもあり、世をなんとかしたいと思いつつ、なすすべなく日々むなししく悩み続ける哀れな君主の姿でしかないからである。強い帝王ぶりならぬ弱い帝王ぶりが九九番歌の眼目とも言えるが、もう少し歌の表現に分け入ってみると、後鳥羽院の狙いが見えてくる。表現の肝となっているのは「あぢきなく」という形容詞である。勅撰集における「あぢきなく」の初例は、『古今集』「春上」(題しらず よみ人しらず)の「やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけり」(三四番)だが、「あぢきなく」にはどうやら恋のイメージが付着していたようである。『古今集』歌の歌意は、訪ねてくれた恋人の匂いと梅の香りを混同するから、軒の近くには梅は植えないというもので、春の部立だが、恋のイメージが濃密に漂っている。甘美な梅の香りは恋の香りでもあったのだ。また、同集「夏」の素性詠「郭公はつこゑきけばあぢきなくぬしさだまらぬこひせらるはた」(一四三番)も同様である。郭公の初音を聞くと、恋を無自覚にってしまうというのであるから。

両歌ともに「またれ」「こひせらる」の自発の助動詞（傍線部）が実によく効いている。

その後も、「あぢきなく」をもつ歌は概ね恋歌となる。和歌における恋は成就しない恋が前提にあるから、「あぢきなく」はどうにもならない、はかない恋のイメージとほぼ重なり合う。九九番歌にも、恋のイメージは、「人もをし人もうらめし」「ものおもふ身」が「あぢきなく」と結びついて一見強まるものの、もう一つのキーワードたる「世を思ふゆゑに」という治世を示唆する言葉によって、恋のイメージは一気に一掃され、治世に関する君主の苦悩へとテーマは転化していく。と同時に、治世自体もうまくいかないことを「あぢきなく」によって歌の主体（＝詠者である後鳥羽院）に自覚させて、「述懐」のテーマが全面的に覆う和歌として結実しているのである。見事な転調といってよい。ここが後鳥羽院の天才性でもある。

次に、順徳院の一〇〇番歌を見ておこう。歌意は、宮中の古い軒端に生えている忍ぶ草ではないが、いくら慕っても慕いきれないくらい輝かしい昔だったんだなというものだろう。「しのぶ」が「忍ぶ草」と恋い慕うを意味する「偲ぶ」との掛詞になっている。そして、この和歌の肝となるのは、「しのぶ」と「むかしなりけり」という言葉である。

ここでは、「むかしなりけり」を見ておきたい。後一条院の崩御で出家し横川に籠もった源顕基は、上東門院（彰子、後一条院の母）からの便りに答えて、「よをすててやどをいでにしみなれどもなほこひしきはむかしなりけり」と詠んでいる（『後拾遺集』雑三、一〇二九番）。世を捨てて（出家して）、宿（俗界）を出てしまった私だけれども、やはり恋しいのは昔（後一条院に仕えていたころ）なんだな、という歌意だが、順徳院詠と近い立ち位置がうかがえる。さらに、順徳院と同時代で配流

後の後鳥羽院と深く交流した藤原家隆には、「うきながらみし世はなほも忍ばれてきくは恋しき昔なりけり」（『壬二集』雑、九六番）がある。

辛いながらも見てきた世のことがやはり慕われて、聞くのは恋しい昔だったなあと、これまた順徳院詠と近い感覚の歌である。つまり、つらい現状から見ると、かつては輝かしい昔（むろん、これとおそらくは幻想の昔であったはずだが）があったという認識である。それでも、順徳院詠が他の類似歌と異なるのは、「ももしきや」にあるように、舞台が宮中であり、詠者がかつて宮中の長であった帝王であり、現在佐渡に配流されている身であることだろう。よって、和歌史における初例となった、「なほあまりある」という言葉が順徳院の無念さ・嘆きをより増幅強調する効果をもたらしたと思われる。順徳院の述懐も父後鳥羽院同様に帝王の述懐であるが、父に較べて失われた宮中に対する個人的な思いがより前景化していると言ってよいだろう。

さて、後鳥羽院・順徳院の述懐歌を見てきて、おおむね、述懐なるものがお分かりになったと思うが、それでは、どうして日本において、述懐歌なるものが生まれできたのだろうか。私は、「やまとうたは人のこころをたねとしてよろづのことのはとぞなれりける」（『古今集』仮名序）と説かれる和歌の原理が絡んでいると見ている。つまり、やまとうた（＝和歌）は人間の心を種々根源としてそれがよろづのことのはとなったものと認識されているということは、和歌とは心の言語化なのである。ならば、心をもっとも表現しうる対象は何か。それは、端的に恋情と悔恨・後悔となるだろう。和歌は漢詩と異なり、政治がらみのことは詠まない。よって、我が身の不遇やまならぬことを嘆き、昔を恋い慕うといった述懐の和歌となるのである。「心」をもっとも表現しうるものとして、恋歌と並んで述懐歌があった。そのように考えてみると、た

とえ題詠による演技であっても、いかに不遇で不幸であったかを切実に涙がましく、かつ、めめしく歌い上げるのが述懐歌なるものの正しいありようだったのである。

さて、上記の二首のうち、とりわけ順徳院詠に見られる失われた時代を恋い慕う感情は、その後はどうなったのだろうか。目を近代日本に転じたい。日本における失われた国とは、人によっては、戦前の大日本帝國となるだろうが、明治を生きた旧幕臣にとっては光り輝くご公儀（徳川）の御世であつたらう。それを代表するのが福地桜痴（源一郎、一八四一〜一九〇六）となるのではないか。戯れにわざわざ「桜痴」と号したくらいであるから、風流才子と呼ばれながらもひにくれ方も尋常ではない。桜痴は明治期物書きとして多くの書物をものしたが、その中に幕府の崩壊過程と原因を追究した『幕府滅亡論』（一八九二年）と幕末政治家列伝と言つてよい『幕末政治家』（一九〇〇年）がある。二冊とも彼が幕臣として仕えた（と言つても通詞故にさして活躍もできなかったが）幕府を正面から論じた好著だが、やはり「述懐」に告知する心情がにじみ出てくる箇所がある。

嗚呼、源頼朝が初めて幕府を創立してより七百年、その間武門にして大権を掌握して天下を治めたるもの、曰く源氏、曰く北条氏、曰く足利氏、曰く織田氏、曰く豊臣氏、曰く徳川氏、而して、その滅亡の時に於いても、国家のために、国民のために、その社稷を犠牲にしたる者はひとり徳川氏あるのみ。如何ぞ特書擧揚せざるべけんや。

（『幕府滅亡論』）

一概に幕府を挙てことごとく衆愚の府と見做し、その行為みな国家を誤り日本に禍して、以てついに朝廷の譴責を蒙り滅亡したる者なりと論断するがごときは、浅膚の見なるのみ。余が親しく見聞する

所によれば、あるいは方正厳直、私を棄てて公に殉ぜざる者あり、卓識達観、国家を以て己が任とせる者あり、機智穎才、百難を排するの器を有せる者あり、直言讜議、あえて権豪を憚らざる者ありて、もし一々これを観察すれば、その人物中、あるいは明治昭代の今日においても、得やすからざらしほどの材器ありしを信ずるなり。

（『幕末政治家』叙言）

桜痴は、滅亡に際しての幕府の自己犠牲を説き、幕臣の優秀さを称えてやまない。むろん、言つても詮無いことである。時代は旧幕府のことを封建時代と呼び、否定してやまない。桜痴も明治という新時代を生きるべく、ジャーナリストや劇作家、挙げ句の果てには政治家にもなつていくが、それでも、幕府の滅亡という経験は彼をして幕府を顕彰せしめる堂々たる文章を書かせたのである。

一九三九年、文芸批評家保田與重郎（一九一〇〜八二）は、『後鳥羽院』を上梓した（増補版一九四二年）。この中で、保田は、彼がいう「偉大な敗北」の体現者（ナポレオン、日本武尊、木曾義仲）の集大成として後鳥羽院を描いていく。冒頭でも論じているが、承久の乱を起して隠岐に流され、一九年後、その地で崩御したのが後鳥羽院である。だが、保田によれば、後鳥羽院は文芸の王である。なぜか、「偉大な敗北者」だからである。それでは、「偉大な敗北者」でなければ、どうして文芸の王にはなれないのか。それは、保田自身が生きていた文明開化によって生まれた近代日本を批判し、無化するためには、「偉大な敗北者」である後鳥羽院が作り上げた壮大かつ悲しく淋しい伝統に拠るしかないと保田が考えていたからである。戦後、保田は、軍備のみならず、近代産業・工業をも否定して、国民全員が農民になることを説いた『絶対平和論』（一九五〇年）を追放中故に無署名で発表し自ら二年間ほど

実践したが、これは後鳥羽院論からの延長線上にある著作だと言ってよい。敗戦という喪失感を近代批判の根拠かつバネに据えたのである。とはいえ、保田與重郎の恐いところは、滅亡・喪失を嘆くという述懐の感情から、それを文芸創作の起爆材と捉えていることにあった。

だが、後鳥羽院・順徳院・桜痴も保田ほどではないが、述懐を創作の糧にしているのではないか。こうしてみると、述懐も悪いものではない。最後に、まじめな述懐として、南北朝期最も頭脳明晰だった足利直義（一三〇七〜五二）の述懐歌を上げておこう。

貞和百首歌めされし時

左兵衛督直義

二〇〇三 うきながら人のためぞと思はずは何を世にふるなぐさめにせん  
（『新千載集』雑歌中）

『貞和百首』（一三四六年）のうち述懐題で詠まれたものと思われる。貞和年間（一三四五〜五〇）は、直義が幕府の最高実力者として政務に当たっていたが、歌意は、辛いながらも人のためと思わなかったら、何をもって世を生きる慰めにしようかというものだろう。治世がうまくいかないことを嘆いているというよりも、世の人のために今後も政務をやっていくという覚悟が感じられる和歌である。おそらくこれは直義の本音ではあるまいか。よって、合理的理的な人間だった直義の和歌には、やむにやまれるはかない感情などはない。だから、他の歌人の述懐歌と較べて妙に浮いていると推測されるものの、数年後、兄尊氏の執事高師直の扱いをめぐって、兄弟が戦い合う観応の擾乱（一三五〇〜五二）を直義が起こしたこと、さらに、上記の直義詠を収める『新千載集』が完成したとき、直義は既に亡いこと（兄尊氏も完成の前年に死去した）を考えると、直義の本音を記した明るい述懐歌に底知れぬ暗さが見えてくるのは私だけであろうか。

後悔・無念さといった述懐の感情は、明日への希望といった思い以上に実は創作の基盤となるのである。これは少なくとも日本においては（否、世界中もか）今も昔も変わるまい。